

集 報

最近における地方史（青森県）関係圖書の刊行状況は次の如くである。

☆『青森県歴史』才一巻が『みちのく双書』才二十三集として青森県文化財保護協会より刊行された。『みちのく双書』には近年『青森県租税前編』（全三巻）『新撰陸奥国誌』（全六巻）など明治年間に編纂されたものが相次いで取上げられてきたが、これに就く企画として今後続刊される。本書は明治七年十一月に太政官より調査を命ぜられたもので、内容は県庁・制度・政治・県治・付録などの部門に分類されており、明治前期の政治・経済・法令・社会など青森県政がなまの姿で収められている。この期の史料が不足なだけに本書の発刊はその空白を埋めるのに大きな意義をもつものと考ええる。

☆『つがる明治百年』は昭和四十二年三月より三ヶ月にわたり、地元新聞『陸奥新報』に連載されたもので、著者上山徳郎氏が述べているように専門的な記述ではなく、津軽地方の明治・大正・昭和の三代を、政治・経済・人物・生活・民俗などの諸分野から項目を求め、座談会も加えて、物語風にまとめている。巻末に『つがる明治百年風俗略年表』を載せ明治元年より昭和三十一年に至る重要事項とその年の特色をあげている。「トテ馬車」といった項目は、ここ十年の間にバスにおされ急速に姿を消してゆこうとしているものだけに歴史の移り変りを身近に

感じさせる。（陸奥新報仕刊）

☆『水を切る』―青森県の水資源―本書は昭和四十一年一月から八月にかけて地方紙『東奥日報』に連載された「水資源を考えよう」を加筆補正したもので、同紙の長谷誠一氏および工藤智二氏が執筆を担当。内容的に見ると序論の「水をめぐる三つの悩み」からはじまり水害、水の利用、ダム、農業用水などの諸問題を説き、水力再開発、水と生活にも及んでいる。書名の示すとおり青森県の水資源を縦横に切り研究・検討を加えている。一見歴史とは無関係の感じのする本書ではあるが、古く永祿日記にも見られる水害の苦しみや、江戸時代以来水を治めつつ新田、開発に取り組んできた青森県民にとつて、現時点で水を見つめ、今後の開発を考えるために必読の書であり、現代の史料という意味を持つ。逆に江戸時代―明治―現代に至る開拓史・災害・凶作に関する研究を行なう者にとつても一読の要ありと考える。（東奥日報仕刊）

☆『郷土の先人を語る』(1)・(2) 昭和三十九年から四十年末にかけて十三回にわたり弘前図書館が各界で活躍した郷土の人物をテーマに市民文化講座を開いた。本書はその際の記録をシリーズとして刊行したもので(1)には陸奥鶴岡(相沢文蔵氏)、津森蔵助(斎藤康司氏)、建部綾足(小野正文氏)が、(2)には菊池九郎(藤田本太郎氏)、佐々木五三郎(三浦昌武氏)、太宰治(上(相馬正一氏)が収められている。このうち江戸後期の建部綾足、昭和の太宰治を除いた諸人物はいずれも明治時代を舞台に活躍しており、明治百年記念出版と銘打つにふさわしい編集である。本シリーズが今後順調に刊行されることを期待

する。(弘前図書館刊)

☆以上のほか町村史(誌)関係では『五戸町誌』(五戸町誌刊行委員会)があり、『郷土史大系』2青森・岩手・秋田・山形編(宝文堂)も再版され、青森県関係は成田末五郎氏が執筆している。また岡山洋八氏の『青森県図書館運動史』(津軽書房)や民俗学関係の『能田多代子著作集』(津軽書房)など特色ある出版が続いている。なお考古学関係では『全国遺跡地図(青森県)』が文化財保護委員会の手により出版され、去る昭和三十六年以来青森県全体にわたり行なわれた埋蔵文化財調査の成果が示された。一方弘前市教育委員会の岩木山麓調査のまとめである『岩木山古代遺跡発掘報告書』も調査開始以来十年の労苦が凝り、近く完成の予定である。

[43・2・20 佐藤仁]